

理論・アプローチの組み合わせと融合から折衷モデルをつくる

—Vol.2 折衷モデルと実践事例の適応—

○ 神奈川県立保健福祉大学 川村隆彦 (002834)

理論・アプローチ・折衷モデル

1. 研究目的

本研究の目的は、ソーシャルワーカーが実践において活用できる臨床的な理論やアプローチ（以下理論・アプローチ）の特性、指向性、効果等を整理し、それぞれのもつ枠組みや制限を可能な限り取り払い、理論・アプローチ同士の組み合わせと融合を可能にすることである。これにより、現場のソーシャルワーカーは、もっと理論・アプローチを自由に使いこなすことができ、それによって専門的力量を高めることができる。

我が国のソーシャルワーク教育においては、臨床的な理論・アプローチは、実践での活用方法までは伝え切れていない。しかしながら、現場のソーシャルワーカーは、今日、人の抱える問題が多様化、深刻化していることを実感しており、問題解決のための有益なレパートリーを探している。彼らが、行動、認知、危機介入、問題解決、課題中心、システム、ナラティブ等、多くの理論・アプローチのエッセンスを理解し、自由に組み合わせ、融合させ、実践に取り入れることができれば、より専門性の高い支援が可能になる。

本研究では、どのような理論と理論、アプローチとアプローチが組み合わせられ、融合されやすいのかを検討し、多様な問題への対処が可能な折衷モデルをつくることを目標としている。

尚、本研究は、同テーマでの「Vol.1 組み合わせと融合のグルーピング」（日本ソーシャルワーク学会33回大会にて発表予定）の継続のため、要旨には共通した内容が含まれる。

2. 研究の視点および方法

研究の全体像は4つのステージに分類される。

<p style="text-align: center;">ステージ1</p> <p>理論・アプローチを可能な限りシンプルに示し、エッセンスを表す段階</p>	<p style="text-align: center;">ステージ3</p> <p>理論・アプローチを組み合わせ、融合した新しい折衷モデルと実践的事例を照合しながら、適応状況を検討する段階</p>
<p style="text-align: center;">ステージ2</p> <p>理論・アプローチ同士の共通／相違項を調べ、組み合わせや融合の可能性を検討する段階</p>	<p style="text-align: center;">ステージ4</p> <p>新しい折衷モデルを実践に活用して、その効果を検証する段階</p>

ステージ1には、すでに取り組んでおり、成果の一部を2011年に「ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ」（中央法規出版）で著した。この中では、主にソーシャルワークの臨床で用いる10の理論・アプローチに焦点をあて、可能な限りシンプルなエッセンスを示した。その後、ステージ2に取り組み、成果を2016年7月、日本ソーシャルワーク学会にて発表予定である。そして今回は、ステージ3に取り組んでいる経過を報告す

る予定としている。具体的方法としては、組み合わせや融合性をもとにグルーピングした理論・アプローチで、どのような実践に適應できるかを、実践事例をもとに想定し、さらにグルーピングを進める。

3. 倫理的配慮

本研究は、文献研究として、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて研究を進めている。研究にあたっては、個人を特定したり、不利益をもたらすようなものはない。

4. 研究結果

<組み合わせとして考えられる汎用性の高い折衷モデル1>

- ① クライアント中心アプローチ—②エコロジカルアプローチ—③認知行動アプローチ—④課題中心アプローチ

クライアントとの関係形成時期には、傾聴や共感等を大切にクライアント中心の手法が必要であり、その後、エコロジカルによるアセスメント手法へと移行する。問題の全体像が明らかになった時点で、個人に対する認知や行動への介入を行いつつ社会資源につなげる。その後、到達目標と課題を明らかにし、課題中心アプローチに取り組む。こうした手法は、より汎用性が高く、様々な事例に適應できる。

<組み合わせとして考えられる汎用性の高い折衷モデル2>

- ① 危機介入—②エンパワメント（自己信頼～他者信頼）—③問題解決—④ナラティブ

危機的な状況にあるクライアントへの介入のケース：落ち着いた頃、エンパワメントに焦点を当てる。特に、自己信頼に時間をかけ、その後、他者への信頼を得るようグループワーク等も活用する。その後、自身の問題に向き合い、動機づけ、能力強化し、機会を提供しつつ解決に力を注ぐ。最後、危機によって失ったものを受け入れるためにナラティブへと移行する。こうした手法は、主に、中途障害や喪失体験のあるクライアントに適應できる。その他、融合しやすい理論やアプローチについては、当日提示する。

5. 考察

「組み合わせ」として、汎用性が高い折衷モデルでは、一般的によく見られるケースに適應できる。しかしあくまで大枠を提供するだけで、個別性を考慮しながら修正する必要がある。重要なことは、折衷モデルにクライアントを当てはめることなく、理論・アプローチの組み合わせや融合を数多く熟知することで、クライアントの個別性に合わせ、タイミングよく、柔軟にモデル内のアプローチを組み替えて対応できることが最も望ましい。「融合」に関しては、別々の理論・モデルをひとつの枠で同時に併用することが可能であり、よりクライアントの個別性を考慮することができる。

理論・アプローチの「組み合わせと融合」そして、これらが適應可能な「実践事例」を明らかにすることで、ソーシャルワーカーは、よりクライアントの個別性に合わせた支援のレパートリーを選択できる。こうした研究が効果を示し、確立していけば、ソーシャルワーカーは、これまで以上に、保育、心理、教育、精神保健を含む、様々な問題への治療に携わることが可能となる。